



壺とハソウ(北西原古墳群)



フラスコ形の壺(山川古墳群)

フラスコ形の壺をした壺

〜浜名湖周辺からもたらされた須恵器〜

理科の実験器具に、フラスコと呼ばれる首の長いとっくり状の容器があります。この形に似た須恵器の壺が、古墳時代終わりごろの遺跡から発見されています。今回はフラスコの形をした壺について紹介します。

この壺は、フラスコ形長頸瓶と呼ばれ、主に7世紀代の古墳や横穴墓から出土します。市内では山川古墳群(常名)、向原古墳群(中)、寿行地古墳(沖宿町)から発見されています。集落跡での出土が少ないことから、実用品ではなく、葬送儀礼に使う祭祀的な壺であったと思われる。

作り方は、最初にロクロで底部から胴部となるだえん形の形を作ります。次に上部の開いている部分に板状の粘土を貼って、開いている部分をふさぎます。それを横にして上部中心に穴をあけ、煙突状の口縁部を接合します。これで形が出来上がり、乾燥後、窯で焼成して完成です。緑色の釉が掛かっていることが多く、これは焼成中、薪の灰が溶けて付着し、緑色に発色したものです。あらかじめ、灰が付着しやすい場所に置いて焼成したと考えられています。

では、この壺はどこで作られたのでしょうか。静岡県西部にウナギで有名な浜名湖があります。その西岸に、大規模な須恵器の生産地が存在していました。湖西古窯跡群と呼ばれるこの窯跡群は、5世紀から9世紀にかけて操業しましたが、7世紀から8世紀前半に最盛期を迎

えます。県内で発見されたフラスコ形の壺のほとんどは、ここで作られたものです。このほかでは、愛知県でも生産されていましたが、7世紀後半には湖西窯が大部分を占めるようになります。

フラスコ形の壺は、主に東海地方から関東地方、東北地方太平洋岸にもたらされました。当時、政治の中心であった畿内からは、ほとんど発見されていません。7世紀になっても盛んに古墳が作られていた東日本では、フラスコ形の壺などの須恵器を、古墳に供える習慣があったのでしよう。

湖西窯跡群で作られた須恵器は、フラスコ形の壺以外にも、8世紀始めごろまで東日本に大量にもたらされました。市内では、北西原古墳群(常名)、鳥山古墳群(鳥山)、うぐいす平遺跡(上高津新町)などから、底に台の付いた壺や、液体を注ぐ容器のハソウ、鉢が出土しています。

その後東日本では、湖西窯の須恵器は、8世紀中ごろ以降見られなくなります。古墳や横穴墓が作られなくなったことや、東日本でも新治窯跡群など、須恵器生産が活発化したことも、その原因と思われる。

今回紹介した資料は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて8月末まで展示します。ぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場(☎826・7111)

